

常州土浦城之図



▶「常州土浦城之図」部分

私たちは土木や建築技術の進歩により、多様な場所に住むことができるようになってきました。

しかし、技術が今ほど十分ではなく、化石燃料もなかった時代、地理環境は人々の暮らしに大きく作用していました。

土浦は江戸時代に城下町ができ、それが基盤となつて現在までの歴史を刻んできました。では、城下町土浦の歴史はどんな場所から始まったのでしょうか。今からおおよそ360年前の絵図「常州土浦城之図」から当時の様子を考えてみましょう。

絵図で大きな空間を占めるのは町の南東の下沼、南西の上沼、東の霞ヶ浦と、それらをつなぐようにして走る川や水路です。城を取り囲んで「深田」があちこちにあり、また「深田」は、泥状の土が深くまで入り込んだ湿地で、人が足を踏み入れれば必ず沈んで歩くのも困難な田であったようです。

城が築かれる以前、この地は桜川がいくつもの支流に分かれて霞ヶ浦に流れ込む低地でした。桜川の氾濫原の、中洲のようになっているわずかに高い場所に土浦城は築かれました。「深田」はわざわざ造つたものではなく川の流れの名残だったので、道を通らずに周辺から城に入り込もうとすれば身につけた鎧の重みでいっそう身体が沈んでいく、そんな「深田」と水路や堀を城の防衛に利用した水城が土浦城でした。

水に守られた城下町は、深く井戸を掘らな

ければ良質の水脈にあたらず、ひとたび洪水が起これば、町の多くが水没してしまう場所でもありました。

それでも人々が集まり、町が大きくなっていったのは、水際という地理環境が水上交通に便利だったからです。桜川や霞ヶ浦沿岸の村々へは船で行き来することができました。重い荷も水上ならばわずかな力で運ぶことが可能です。河川や沼といった水空間は、要害として人を隔てるものでしたが、同時に船という道具を用いれば自由に行き来できる水の道でもありました。

実際に城下町が築かれたのは土浦ばかりではありません。水戸、川越、栃木など江戸時代に栄えた町の多くが河川や湖沼に接していました。その最たるものが大都市江戸であるといつてもいいでしょう。

1600年代の半ばには霞ヶ浦から利根川、江戸川を経由して江戸へ行くことができるようになります。土浦は江戸への玄関として物資の集散地となつていきました。洪水の不安や、飲料水の不便をもとせず、水のもたらす利便性を選んで人々がこの地に住み続けてきたことを絵図は語っています。

「常州土浦城之図」は縦横2mを超える大きなもので、正保2(1645)年に幕府が全国の城に命じて作らせた城絵図との共通点が多い貴重なものです。改装オープンした博物館2階展示室で見ることが出来ます。

岡市立博物館(☎824・2928)

